



Fore Please /
世界ゴルフ

識聞録

ゴルフビジネスのプロが30年以上回って見て聞いて感じた世界のゴルフ文化をお伝えする当連載。第13回はハウスキャディのお話です。

海外では基本セルフ。名門ではキャディが助言。

海外から来たゴルフファアを日本のゴルフ場に案内すると一番ビックリされるのが、お供してくれるキャディさんたちの存在です。お揃いのユニフォームだけでなく、カート道を進む全員で乗れる乗用カートなども日本独特なカルチャーです。しかし4人の世話を一人でするには限度がありますので、グリーンでボールを拭いてくれたり、クラブを出してくれたりする事がメインの仕事になってしましますね。

一般的に海外のゴルフ場ではセルフで回る場合が多く、アメリカでは乗用カートが用意されていますし、歩きでのラウンドでも引張って行くカートレンタルしたり、自分で持ち込んだりして、キャディのお世話になる事はあまりありません。グリーンまでの距離はヤーデージブックや最近ではGPSナビなどもあるのでそれを参考にできます。しかし、名門コースではビジターにはキャディを用意してくれる事が多いです。そのハウスキャディでもクラブに所属しているケースは少なく、地元の方がアルバイトとしてやっている場合がほとんどです。中にはプラスハンデの方もいたりして、ラウンドレッスンのように、打ち方の指導をしてくれるながらプレー進行をコントロールしている事もあるのです。我々

の技量もすぐに見抜いて、無難なショットをさせないだけでなく、クラブの選択においても良い勉強になります。

マスターズは83年までハウスキャディが決まり。

Vol.13

ハウスキャディの存在

**数々の歴史を作ってきた
オーガスタの
ハウスキャディ**



を50回務めた記録を持つているほど。18番グリーンで涙を流すクレンショーの肩を抱いている様子には、ハウスキャディという枠を超えた存在感を覚えたものです。

オーガスタナショナルは10年前に比べても距離も長くなり、硬くて速いグリーンだけでなくセカンドカットと呼ばれる長めのフェアウェイなど選手達を悩ませていきます。オーガスタナショナルは初めて参加する選手やアマチュアの選手達にハウスキャディの中でもエース格を積極的に紹介していますし、おそらくラウンド中に1〜2ストロークは有利になると言われている程です。

最近でこそ注目されるようになったキャディの仕事、オーガスタではそのキャディの為に5月にコースがクローズする前の日にキャディデイと称してコースを開放しラウンドイベントがあります。キャディの存在がどれほど重要なか推して知るべしですね。

ゴルフビジネスのプロフェッショナル

神野方仁 (じんの・みちひと)
1956年生まれ。テレ・プランニング・インターナショナル株式会社代表取締役社長。国内外の様々なスポーツビジネスに関わり、中でもゴルフはマスターズのようなメ



ジャー大会からジュニアゴルフに至るまで、イベント、放送、広告、マーケティングなどの面に長年携わっている。日記を公開中 Fast Track Michi's Diary:
www.tpi-j.co.jp/diary/index.html

イラスト/ソリマチアキラ